

〔翻 訳〕

『スペクテイター』(45)

——第420号から第429号——

門 田 俊 夫

第420号 1712年7月2日(水曜日)

【アディソン】

情念を存分に奮い立たせる。(ホラティウス)¹⁾

詩歌やフィクションの著者は、材料を外部の対象から借用し、好みに合わせてつなぎ合わせますが、もっと密接に自然をお手本にして、自然から場面全体を選び取る人たちがいます。歴史家、自然哲学者、旅行家、地理学者、要するに、実在の目に見える対象について記述するすべての人たちがこれに当て嵌まります。

適切な言い回しでもって、軍隊を整列させ、戦わせること、偉人たちの不和や陰謀や嫉妬を私たちの目の前に示すこと、そして、歴史の行為や事件に徐々に私たちを導き入れることが出来るのは、歴史家が持っている非常に好ましい才能です。私たちは主題がほどよい速度で展開していき、気づかないうちに明らかになっていくのを見ることを好みます。それは、楽しい気がかりな状態を保てますし、将来の見込みを立てながら当事者の一方に味方する時間的余裕が持てるからです。実を言いますと、これは歴史家の誠実さというよりも手腕の問題なのですが、歴史家には想像力を喜ばす資格があるとだけ言っておきます。この点では、おそらく、彼以前および以降を含めても、リウィウスが群を抜いていると思われ²⁾。彼はあらゆることを非常に生き生きと描写しますので、彼の描き出す歴史は見事な絵画となっています。そして、どの話も非常に適切な出来事に言及していますので、読者はある種観客の立場に置かれ、登場する人々に対応するさまざまな感情を抱くこととなります。

ところで、こういった著者の中では、地球や天空に関する理論や望遠鏡による発見にしても、自然に関するその他のことにしても、新しい哲学の著者ほど想像力を喜ばせ、かつ想像力に幅をもたせてくれるものはいません。私たちは、緑の葉一枚にどんなに成長しても裸眼では見えない無数の動物が群がっていることを知って大きな喜びを覚えます。金属や鉱物や植物や流星に関する論文には、理性だけでなく空想をも魅了する何かがあります。

1) ホラティウス『詩の技法』100

2) リウィウス (B.C. 59-A.D. 17) はローマの史家で、『ローマ建国史』全142巻を著した。

地球とその周囲にあるいくつかの惑星を見渡すとき、私たちは喜ばしい驚きで満たされます。非常に多くの世界がつぎつぎにぶら下がっており、驚くほど華麗にかつ荘厳に回転軸を中心にして滑るように動いているのを見ると驚きで一杯になります。この後で、遙か彼方の土星から恒星まで届き、無限の広がりを持っている広大な天空について夢想すると、想像力の能力は計り知れない眺めで満たされ、それを理解しようとする力が加わります。さらに高みに上って、恒星ひとつひとつにそれぞれ惑星の一群がある広大な炎の海を夢想し、最強の望遠鏡でも見えない天空の深淵に沈み込んでいる新たな天空と新たな光を発見すれば、私たちは宇宙の迷宮に入り込んで途方に暮れ、自然の広大さと荘厳さに当惑します。

それぞれの対象のバランスを考えながら徐々に空想を広げていくほど喜ばしいものはありません。人間の体と地球の大きさ、地球と太陽の軌道、軌道と恒星の活動領域、活動領域と全創造物の巡回路、全創造物と至る所に拡散している無限の空間を比較しながら考えることになるわけです。想像力が下方に働き、人体の大きさを考えて見ると、ダニの百分の一にみたない動物の場合、個々の手足、手足を動かしている活力、そしてその活力を生み出している精気、さらに、十分成長するまでは各部位が釣り合いが取れるように微小であることが分かります。以上のことを考えた後で、極少量の動物精気を取り上げ、世の中に出て行くこの能力が狭い範囲内に封じ込められていることを考えますと、天界と地球、星々と惑星、そしてあらゆる生き物が、この宇宙では互いに似通った状態に置かれていることが分かります。こういった思索は、実例として示されている証拠があるのですが、その精密さからそのような思考をしない人々にとっては馬鹿げて見えます。それどころか、さらに深めていくと、この小さな世界の最小の分子の中に、別の宇宙につむぎだされていく新しい使い尽くされていない豊富な物質を発見できるかもしれないのです。

このテーマについて長々と論じてきました。なぜなら、これは私たちの想像力の欠陥だけでなく限界を明らかにしてくれると考えているからです。私たちの想像力の活動範囲はとても狭い空間に限られており、非常に大きなものあるいは非常に小さなものを考えると、たちまち活動を停止してしまいます。ダニの百分の一あるいは20倍の大きさの動物を考えて見て下さい。あるいは、直径が地球の千倍と百万倍とを比べて見て下さい。そうすると、こういった異常な大きさあるいは小ささに対応できる尺度が私たちの心の中にはないことに気づきます。実際、悟性は私たちの周囲の無限の空間を切り開きますが、想像力はわずかな努力をするものの、直ちに行き詰まって、周囲の広大な空間に呑み込まれてしまいます³⁾。理性は無限のさまざまな境界を通り抜けて分子まで追求できますが、空想はすぐに見失ってしまい、一種の亀裂にはまり込み、もっと知覚できる大きさのものであればいいと考えます⁴⁾。大小両極端なものに対しては、私たちは空想の力を広げることも縮小させ

3) 伝統的な考え方では、想像力は密接に感覚表現と結びついているので、私たちが心に思い描くことができるものしか想像できないというものであった。

4) フォントネルの『世界の複数性に関する会話』(1686)は、アディソンの蔵書にあったとされる。フォントネル(1657-1757)は、コルネイユの甥で、哲学者・科学者・文学者であった。当時の文

ることも出来ません。世界の円周を把握するときには、私たちの能力では対象が大き過ぎますし、原子というものを考えるときには、対象が小さ過ぎて存在しなくなります。

おそらく想像力のこの欠陥は、魂それ自体にあるのではなく、体との関連から生じるのかもしれませんが。多分、頭脳にはそういったさまざまな印象を受け入れる余地がないのかもしれませんが。また、動物精気が非常に大きなあるいは非常に微小なものを思い描くことが出来ないのかもしれませんが。にもかかわらず、人間の魂はほかの点だけでなくこの能力では死後無限に完璧なものになると考えられますので、この点ではより高い存在の方がはるかに勝っているのだと言えるかもしれません。この結果、いずれ想像力は悟性と手を組んで、宇宙のさまざまな形態や量について明確に考えをまとめることが出来るようになるに違いありません。

第421号 1712年7月3日(木曜日)

【アディソン】

彼は見知らぬ土地で新鮮な泉を探した。

その喜びが疲れを和らげた。(オウィディウス)¹⁾

想像力の喜びは全面的に具体的な対象に精通している特定の著者に限られているわけではなく、道徳や批評や物質から抽象されたその他の思索に精通している人たちの間でもしばしば見受けられます。彼らは目に見えるものを直接扱うことはしませんが、しばしば直喩や隠喩や寓喩を引き出します。この引喩によって、悟性の真実はいわば想像力によって反映されます。観念に色彩や形のようなものを見て取ったり、事柄に描かれた思考の体系を発見できます。そして心は大きな満足感を覚え、二つの能力を同時に喜ばせます。空想は悟性を写し、知的世界の考えを物質世界に翻訳するのに忙しくなるわけです。

著者の優れた技は、一般的には芸術あるいは自然の偉大なあるいは美しい作品から取得されるのですが、喜ばしい引喩を選択することで明らかになります。目新しいものつまり類い稀なものは想像力を喜ばせがちですが、引喩の主たる意図はある著者の文章の解説や説明にありますので、引喩は常に説明する文章よりも名高く一般的なものから借用しなくてはなりません。

寓喩は、うまく選ばれると、論説のすべてを明白かつ美しくさせる光のわだちのような存在です。素晴らしい隠喩は、引き立つように配置されると、その周囲に一種の輝きを放ち、文章全体に光彩を添えます。こういったさまざまな引喩は、実にさまざまな直喩の形態にすぎません。これが想像力を喜ばせるのです。私たちは、類似点があつてもである、つまり、姿勢や雰囲気優雅な絵を見るのを好みますので、類似点は正確無比で心地よいものにしなければなりません。しかし、著名な著者でもこの点では大きな過ちを犯すこと

壇を二分した新旧論争で新しい側を支持し、ラシーヌたちに鋭く諷刺されたという。

1) オウィディウス『変身物語』4.294-5

がよくあります。偉大な学者は、自分たちが精通している学問から比較や引喩を持ってくる傾向があります。その結果、私たちは、どうしてもよいテーマの論文につき合わされ、彼らの学問領域を知らされることになります。私は深遠な知識を持った化学者しか理解できないような愛に関する論説を読んだことがあります。また、デカルト主義者たちの集会でしか説教されないような数多くの説教を聞いたことがあります。一方、実業家たちは通例非常に平凡で馴染みの例証に頼ります。読者をチェスやテニスの試合に引き込んだり、商売や仕事の専門用語を用いて、店から店へと連れ回します。確かに、双方に無数の非常に心地よい引喩を見出すことが出来るかもしれませんが、だが、普遍性ということに関しては、最も楽しい引喩は自然作品の中にあるのです。自然作品からの引喩は、誰にでも明白で、芸術や学問で見出す引喩より楽しいものです。

想像力に影響を与えるこの才能が、分別を飾り立ててその人を他者よりも好ましいものにします。この才能は著述一般を誘発しますが、詩歌のまさに生命であり、最も優れた特色となります。これが目覚しく際立っている詩の場合には、長年に渡ってその詩に生命を与え、読みつがれています。その他のあらゆる美があっても、この一点が欠けてしまますと、無味乾燥で退屈な作品に見えます。創造物のように、大切な何かを内包しているのです。ある種の存在を授け、読者に存在では発見出来ないいくつかの対象を呼び起こさせます。自然を拡張し、神の御業に変化をつけます。要するに、宇宙の最も素晴らしい光景を美しく飾り立てることが出来るのです。つまり、心を目に見えるよりももっと輝かしい見世物や幻で満たすことが可能なわけです。

ここまで空想を満足させる喜びの源泉をいくつか述べました。そこで、適切な項目を立てて、嫌悪と恐怖を喚起させるこれとは反対の対象を並べ立てるのも、おそらくさほど困難ではないと思われます。想像力は喜びだけでなく苦痛も免れることは出来ないからです。頭脳は何らかの事故によって傷ついたり、心が夢や病気によって乱れたりした場合には、空想は憂鬱な考えに圧倒され、空想自らが作り出した夥しい恐ろしい怪物に脅えます。

それはあたかもペンテウスが狂乱のうちに復讐女神の一团を目にし、
太陽も二つに、テーバエも二つに立ち現れるのを見るとき、あるいは、
アガメムノンの子オレステスが舞台上を追い回されるときのような。
このときオレステスは松明と黒い蛇で身を固めた母を逃れようとするが、
すでに復讐なす女神どもが門口に座っている。(ウェルギリウス)²⁾

想像力が苦しめられ、魂そのものが乱れ困惑している頭がおかしくなった人物の光景ほど屈辱的な光景は自然には存在していません。廃墟と化したバビロンはそれほど陰鬱な光景ではありません。ところで、こういった不愉快な話題から離れるために、結論として、この能力が全知全能の神を人間の魂よりも絶対的優位に立たせていること、そして、私た

2) ウェルギリウス『アイネ이스』4.469-73

ちが想像力からだけでもいかに大きな幸不幸を受け取ることが可能であることについて考えて見たいと思います。

ある人が他人に対して影響力を持っており、いとも簡単にさまざまな心象を伝えるかについてはずでに見て来ました。想像力に影響を与えるあらゆる方法を知っており、好みの考えを吹き込み、その考えを適切と思えるだけ恐怖や喜びで満たすことができる人には、非常に大きな力が宿っていると考えられます。こういった人は、言葉の助けを借りなくとも心にイメージを喚起させ、外部の対象の助けを借りなくとも目の前に場面を浮かび上げ、実際に存在しているように思わせることが出来ます。想像力を現在の着想ではおそらく入ってこない美しく輝かしい幻で満たすことが出来ます。また、絶滅して欲しいと思わせ、呪い以外の何物でもないと思うようなおぞましい亡霊を出没させることが出来ます。要するに、こういった人は、この能力一つで有限の存在で天国ないし地獄を作るのに十分なほど実に巧みに魂を奪い去ったり苦しめたりすることが可能なのです。

この想像力の喜びに関する小論は別々の紙面で公表しましたので、各紙面の要旨を一覧にして締め括りたいと思います。

目次

I

他の感覚に勝る視覚の働き。想像力の喜びはそもそも視覚から生じる。想像力の喜びは二つの項目に分類することが出来る。想像力の喜びは、ある点では悟性の喜びに匹敵する。想像力の喜びの範囲。人間がこの喜びから受ける利点。悟性の喜びよりも好ましい点。

II

外部の対象を見渡して得られる想像力の喜びの三つの源泉。巨大なるもの。目新しいものの。美しいもの。この喜びを高めるのに資する他の偶発的な原因。

III

巨大なるもの、目新しいもの、美しいものに喜びを覚える必然的な原因。究極的原因が名高く有益である理由。巨大なるものに喜びを覚える究極的原因。私たちの種の美しいものに喜びを覚える究極的原因。美しいもの全般に喜びを覚える究極的原因。

IV

想像力にとっては、芸術作品よりも自然の作品の方が喜ばしい。自然の作品が喜ばしいと、自然の作品は一層芸術作品に似てくる。前述の観点から見たわが国の植栽と庭園。

V

想像力に影響を及ぼす建築。建築の巨大さは大きさと様式のいずれかに関係がある。古代オリエントの建物の大きさ。こういった建物に関する古代の記述による裏づけ：1. これらの作品を建てる利点 2. 現存しているもの。想像力に影響を及ぼす様式の具体例。このテーマに関するあるフランス人著者の意見。想像力に喜びを与えるものはどれも、巨大なるものか美しいものか目新しいもののいずれかである。

VI

想像力の第二の喜び。この喜びのいくつかの源泉（彫像、絵画、記述、音楽）。これらの源泉から喜びを得る究極的原因。とりわけ、記述について。想像力に対する言葉の力。記述から得る喜びはなぜ読者によって異なるのかその理由。

VII

一連の着想。各着想に割り当てられている必然的原因。著者の想像力を完璧なものにする方法。古代の詩人の中で申し分ない能力を備えていたもの。巨大なるものについてはホメロス。美しいものについてはウェルギリウス。目新しいものについてはオウィディウス。わが国のミルトンはこの三点について申し分がない。

VIII

見て不快なものでも、うまく描写されると想像力に喜びを与える理由。想像力が巨大なるもの、目新しいもの、あるいは美しいものから強い喜びを得る理由。記述されたことが心に情念を喚起させると、喜びは一層大きなものとなる。不快な情念でも適切な記述だと喜ばしいものになる。恐怖も悲嘆も記述によって掻き立てられると、心にとっては喜ばしいものとなる。詩歌やフィクションの著者が持っている特定の利点が想像力を喜ばす。著者に与えられている自由。

IX

ドライデン氏が妖精のような書き方と言っている詩歌について。詩人はどうしたらその資格を有するか。ここから生じる想像力の喜び。この点においては、古代の詩人より現代の詩人の方が優れている理由。イギリスの詩人が現代の詩人の中でも優れている理由。イギリスの詩人の中でも最も優れている者。象徴的人物について。

X

フィクションとは無関係の著者の何が想像力を喜ばすか。歴史が想像力を喜ばす理由。新哲学の著者が想像力を喜ばす理由。想像力の限界と欠陥。この欠陥は想像力にとって不可欠か。

XI

引喩によって抽象化されたものが想像力を喜ばす理由。想像力にとって最も喜ばしい引喩とは何か。偉大な作家この点の能力をどれほど備えているか。想像力一般について。喜びだけでなく苦痛を受け入れる想像力。想像力はどの程度苦痛ないし喜びを受け入れることが可能か。

第422号 1712年7月4日（金曜日）

【スティール】

私がこれを書いているのは、暇がたっぷりあるからではなく
あなたへの愛からなのです。（キケロ）¹⁾

1) キケロ『ファルミアエ』7.1.6

ある人々がからかいに対して抱いている間違った考えほど交際の妨げになるものはありません。社交の場では、確かなことは相手の善意を獲得することを第一目標とすべきです。そのためには、相手に心を向けていることを見せる必要があります。そうだとすれば、親しい仲間に話しかけるときに、いわゆる、辛らつあるいは痛烈を装うことほど馬鹿げたことはありません。大胆さ以外にはいいところのない人は、やり方がまずくて愛想よくはなれません。なぜなら、他人より優れている点を発揮しようとする、自らを敵に仕立て上げなくてはならないからです。皮肉屋の紳士も同様です。相手の心を当惑させたり赤面させたりするようなことを言うことは、ある種の殺人行為です。私が思うに、相手が気に入っているか不快に感じているか気遣っていないことを示すのは許し難い罪です。ところで、私は冗談を言うてはいけないと言っているのではなく、冗談は冗談に留めておいて欲しいのです。一度に複数の人に話し掛けるのがどうしようもなく苦手な私を、大勢の前で喋らせ、恥辱と嘲笑の目に合わせるのには冗談とは言えません。私には寡黙という弱点があってそんなことは出来ないのです。

カリステネス²⁾は健全な判断力（これがないと機知を備えているとは言えませんが）が備わった素晴らしい機知の持ち主です。この紳士は私の知人の最も優れている点までもからかいの対象とします。彼は、相手がそれ自体賞賛に値することを過剰に持っていることを心の中でうしろめたく思っているような事柄をからかいの対象にするわけです。彼は相手がどういった人物か十分に理解しており、少々行き過ぎていと言っても怒りを買うと危惧しなくても済みます。寛大な人は贅沢で向こう見ずだと非難されることには耐え、戒告者に怒りを覚えることはありません。これまで優れた著者の指標とされたことは、優れた仲間の性格に適応することです。優れた著者が書いたものだと読者は自分に喜びを覚えますし、感じのよい人と同席すると、その人物よりも友人のほうが楽しくなります。カリステネスは真似の出来ないほど愉快地これをやったのけます。先日、彼は自慢したような素振りの若い将校に聞えるように、あの紳士はどう見ても将官の雰囲気と備えているね、と友にささやきました。するとその若者は直ちに落ち着き払い、それにふさわしい振舞いとなったのです。カリステネスは相手を自らの強みとは場違いな関係に至らせ、とても滑稽に見えるほど自身に満足感を覚えさせることが出来ます。この場合、その相手は自ら進んで愚かな存在となってしまいます。そこで、私が思いますに、からかいを感じの良いのにするためには、相手が自分がからかわれていることを知らないか、自分に自信があると思っているかのいずれかでないと駄目なのです。

アセタス³⁾はこれとはまったく逆の才能の持ち主で、公正ではありませんが、カリステネスよりも広く賞賛されています。アセタスはからかう相手の節度や弱点を一切配慮しません。資質とか謙虚さが相手よりも勝っていても、攻撃するときには一切情けをかけませ

2) カリステネス (c.360-328B.C.) はギリシアの哲学者・歴史家でアリストテレスの甥。アレクサンドロス大王の東洋かぶれを非難して投獄され、獄死した。

3) アセタスはラテン語で「酢」を意味する acetum に由来する。「辛らつな機知、皮肉」という意味で Acetum Italicum というフレーズがよく知られていた。

ん。彼は親友がうろたえるのを見て喜び、自分で喝采して大声で笑うことができます。彼のからかいはいつも人々を分裂させ、関心をばらばらに引き離しますが、カリステネスは人々をつなぎ合わせ、自分だけでなく全員を喜ばせます。

上手にからかうためには、どうしても喋ることに思いやりの気持がないと駄目です。馴れ馴れしいことを言うためには、友であるということを忘れてはいけません。アセタスはお付き合いの場から追放されてしかるべきです。なぜなら、彼は相手に苦痛を与えることで浮かれ騒ぐからです。単なる悪意は、しばしば秀でている人々に対してよく向けられるものですが、人々を我慢させることになります。そして、同席している人々は必ず誰かが犠牲にされるのを見ることになります。機知があるとの評判はすべて、人々に意地悪くすることから得られる喜びのせいなのです。

ミニュティアスには人の愛情を得る機知が備わっています。同時に、彼は自身の欠点に対してもその機知を発揮します。彼は自分自身も同じ欠点があるとのめかすことで、からかう相手をうろたえさせないコツを身につけています。彼はこれを手際よくやりますので、相手にというよりもむしろ自分のことで嘆いているように見えます。

人々の間に、どういうわけか勝手に互いを不快にさせることが行き渡っているのを見るのは実に奇怪なことです。時として、誰が一番不快かといった争いになっていると思えます。過去の愚行に言及するとか永遠に忘れておきたいと思っていることを蘇らせることをほめかすことは、著名な人たちの間でもよく見られることです。こういったやり方は、相手をフェンシングの選手の技能でもって突き刺すのではなく、肉屋の残酷さでもって切り刻むことになります。私が思いますに、苦しみ取り乱している人がいるところで浮かれ騒ぐことが出来るのは、人間性と良識あるマナーの持ち主にはふさわしいことではありません。お付き合いに対して真に分別のある人は、相手の欠陥に対して勝ち誇るのではなく、お互いの素晴らしい点を伝えることに喜びを見い出します。フォーティアスは、世の中に愚か者がいなかったら、才人と思われたに違いありません。彼は長所の引き立て役になることを欲してはいませんが、相手のいいところを認めることに天性の喜びを見い出します。そこで、知人たちは誰もが、彼自身の欠点を感謝の気持ちから大目に見ます。

以上からかいに成功する人、失敗する人のタイプをいくつか見て来ましたので、もう少し立ち入ってこの上なく心地よい例を取り上げても悪くはないと思います。これは、罪人に対する敵意からではなく、罪に対する軽蔑の念から悪徳を諷刺するときに見られると私は考えます。コングリーヴ氏のドリスがこの種の傑作と言えます。彼女は完全に見捨てられた女性ですが、見事なからかいとなる生意気な言葉は、唯一寛大な気持から発せられるのです⁴⁾。

そこで、彼女の方法は独特です。

その方法は生まれつきなのか、経験から手に入れたのか、

4) コングリーヴへの献辞で、スティールはドリスの無比の才能を賞賛している。

私は言う積もりはありません。
 ある人が一晩で彼女の好意を獲得しますが、
 翌日には彼女はそれを否定できます。
 見知らぬ男性の顔をまじまじと見つめます。
 まるで一度も出会ったことのない男性を見るように。

彼女は真実をとともうまく隠すことができます。
 非常にうまく恋人を作りますが、目を信じてはいません。
 すべては夢だと思うのです。

気前のよさが分からない人は、これを淫らで卑劣だと
 非難しますが、授けたものを忘れるのは、
 気高い心を物語っているのです。

第423号 1712年7月5日(土曜日)

【スタイル】

つい最近まではぴったりだった。(ホラティウス)¹⁾

私は自分のことを女性の守護者のようなものだと考えて、常に、女性の関心を引くことを述べるように努めています。本日の紙面は若い女性のためにあてたいと思います。私の与える警告は若い人だけでなく女性全般に有益なものと考えます。本日の読み物の主人公の名前はグロリアーナとします。彼女は裕福で若く美しいとお伝えしますと、皆さんは賞賛者には何不自由しないと思われることでしょう。彼女が町にやって来てから恋人の数は25名ほどになります。彼らは寡婦資産や継承譲与財産を残すといって彼女に言い寄っています。双方とも何もなかったかのように近づいたり遠ざかったりします。彼女は大変な美人ですので、証書の一項には彼女の目の輝き、彼女の頭の良さ、彼女の人間的な美点に勝るほどの除外条項が付け加わります。非常にずうずうしく言い寄って来る人たちの中に、とても根気よく顔を出している人が二人います。この二人の打ち込み方にはどこか尋常でなく、狡猾なところがありますので、私としては、彼女に警告を発しておくのが妥当と考えて、以下のような手紙をしたためたわけです。

前略

このところ公の場で貴女に付き従っている二人の紳士のことが気になって仕方ありません。二人とも貴女の家で気楽に出入りしています。実は、二人の間では話がついているのです。非常に熱心に言い寄っているダモンは、貴女をものにする気はありませんし、二人

1) ホラティウス『頌詩』3.26.1

で話がついているのですが、実は貴女に無関心に見えるストレフォンが本命なのです。ワインを飲み交わしながらこの筋書きが出来たのです。ストレフォンは初めて貴女に想いを寄せたとき、ダモンに自分のライバルになって欲しいと申し出ました。ストレフォンがこれを伝えるとき、私は居酒屋ですぐ近くに居合わせていたので、否応なく耳に入って来たわけです。彼は深いため息をついて、「ダモン、僕はずっとあの美の奇跡のようなグロリアーナに想いを寄せているのだ。君が僕の不動のライバルでいてくれたら、確実にものにできるのだが」と言いました。「この申し入れに気を悪くしないでくれ。私の行動基準は、君の主張との対比から利するという自惚れではなく、彼女の気性に対する知識なのだ。グロリアーナは大変な分別の持ち主で、人生の喜びを知っており、多くの女性たちのように、関心のない男性に屈することはないのだ。彼女は賢明なので、有頂天とか愛慕の感情をいくら表現しても彼女は気持を動かすことはない。彼女をものにする者は彼女の同情を買う人物ではなく、彼女が望む人物でなくてはならない。そのためには、愛する女性にことさら言い寄らずに心地よい振舞いをしなくてはならない。君がグロリアーナのことを想ってため息をつき、どうしても欲しいと思っているほど心優しい振舞いをするのであれば、僕は彼女には心からの敬意を払った振舞いをし、恋人としての想いはないように振る舞うことにする。こうすることで、僕はこの上なく好ましい人物と映るだろう。」結婚する意図がまったくないダモンは、この計画に簡単に乗りました。貴女のいるあらゆる場所に、ダモンも顔を出すことでしょう。ダモンは服装もマナーの点でもまったく心を動かすことはなく、常にストレフォンとは正反対の振舞いをするようになります。これまでのところ、二人はうまくやっており、貴女の関心は絶えずストレフォンに向いており、ダモンには向いていません。二人は会って、貴女の振舞いに関する印象を比較しています。先日貴女の元に届けられた手紙は、貴女の怒りを知るための仕掛けだったのです。貴女がダモンの署名入りの恋文を見て、馬鹿にして目をそらし、何て厚かましいと叫んだとき、彼には想い焦がれている彼に恥をかかせないで貴女を遠ざける可能性を与えたわけです。

私が心配していますのは、貴女が心の整理をするときに、ご自分のやっていることが分かっており、失う前にそれを検証しているかどうかということなのです。ストレフォンは貴女にとって大切な人との礼儀正しい会話を否定しますし、貴女を愛している人物にはほど遠いといった態度を取ります。このうわべは無関心を装うことで、振舞いには誠実であるといった利点が生れます。そして、よく思われたいということには無関心であると見せかけることによって、いつの間にか貴女に気に入られているのです。もし貴女が今後の対応を見守っていれば、ダモンが貴女との関係に辟易したらすぐにでもストレフォンが礼儀正しく貴女の元を訪れてくることが分かります。貴女はとても分別がありますが、一方が情熱で不愉快な思いをさせようとし、もう一方が情熱を見せずに喜びを与えようとうまく仕組まれた罠から逃れるのは簡単なことでないことに気づかれるに違いありません。貴女の気持の変化はすべて注意深く監視されていますし、二人の迅速かつ忠実な情報のお陰で、恋人たちには抗し難い利点が授けられています。どうか用心なさって、相手が夢中になっていると分かるまでは、優しい声をかけてくる人には十二分にお気をつけ下さい。

草々

ストレフォンはこの婦人の好意を獲得することでは大きく前進します。なぜなら、たいていの女性はちょっとした誇りと否認に動かされますので、ストレフォンはこの密かな求愛方法によって誇りと否認という双方の動機に効果を発揮するからです。彼は昨日、ダモンから表に「素早く」と書かれたつぎの知らせを受け取りました。

「万事順調。彼女は小生に激怒している。おそらく心底小生のことを憎んでいるに違いない。訪ねてみる頃合なり。ではまた。」

ストレフォンの陽気さとダモンのうっとうしさとの比較は、彼女の心に、前者にはとても心地よい時間を予測させ、後者には面白味のないとの予測から来る嫌悪感を植え付けます。婦人がある人物に嫌気がさしたときが、名乗り出る絶好のチャンスです。二人が互いに有利になるように行動している今回の方法は非常に危険ですので、この攻囲にどういったら耐えられるか私にはお伝えすることは出来ません。グロリアーナの置かれている状態は取り返しがつかないのではと危惧しています。なぜなら、ストレフォンは疑われずに気に入らせる機会があまりにも多くありますので、彼女のやれることは今勧められているように、彼の情熱の説明を受け、彼女がこれまでに抱いている感情を克服できるかどうか考えて見ることです。一方が避けるべき相手だと分かれますと、もう一方が救いを求めて駆け込むのにふさわしい人物となります。二人して女性を占有し、彼女を世間から隔離させて、征服のために同盟を組んで、時折、互いに彼女の愛と憎しみをもてあそぶことができます。

要注意：私は愛情の領域に関するその他多くの秘訣を了解していますが、女性たちに警告を発する一方で、わが男性たちに指図することを検討します。

第424号 1712年7月7日（月曜日）

【スティール】

満ち足りた気持であれば、ウルブラの地でも
見つかるだろう。(ホラティウス)¹⁾

6月24日、ロンドンにて

観察者殿

友人を自分で選ぶことが出来る人がしっかり考えたうえで、自分の気質にふさわしい人を選ばなかったとしたら、大いに責められてしかるべきです。選択できないとか選択が間違っていて、やむを得ずお付き合いせざるを得ない場合には、出来るだけ気楽に振る舞う

1) ホラティウス『書簡詩』1.11.30

ことが大事になります。

この点では、これまで何度も言われて来たことを繰り返すしかないものと思います。とはいえ、誰もが例外なく、これを実践しているものと考えます。今は一年のうちでもいろいろな人たちが数多く、仕事と快楽のこの場所から田舎の孤独な生活に引きこもる時季です。これ以上前置きをせずに、彼らには出来るだけ気分よく田舎に引きこもるように助言するのがふさわしいものと考えます。なぜなら、田舎の生活はこの上なく楽しいものと言われており、事実そうなのですが、それは自由時間と片田舎の楽しみ方を知っている人だけに当て嵌まるからです。

絶えず仕事や仲間の助けがないと生活できない人々に関しては、田舎には取引所も劇場もコーヒーハウスも、そしてまた、家族に起こる度重なる出来事からの気分転換をさせてくれるさまざまな娯楽もないのだということをよく考えておく必要があります。自分の時間の大半は自分で処理しなくてはなりません。そのため、町を離れる前に、どうしたら快適に過ごせるか考えておくことが肝要です。

観察者殿、私は思い出すのですが、貴方がサー・ロジャーの田舎の屋敷から与えてくださった助言のお陰で、去年はとても楽しく過ごせました。私はその助言に言及したいのです。なぜなら、一家の主人が貴方のおっしゃるような人であれば生活は楽しくないはずはないからです。したがって、貴方の友人は（私の言いたいのは彼の家庭的な人柄なのですが）ほかの人が真似をするように推奨してもし過ぎることはありません。彼が近隣の人やほかのすべての人々、さらには一家の召使にまでも、愛想よく慈悲心を持って接するさまは実に素晴らしいものです。これはめったに真似の出来ることではありません。この代わりに私たちがよく耳にするのは、意地の悪い戒めの言葉や大声や小言なのです。主人の機嫌や気質は一家の他の人たち全員に大きく影響しますので、私としては貴方の助言が気になるわけです。

友人や知人間の心情の一致や心優しい関係は、生活における最大の喜びです。これは疑う余地のない真実です。その一方で、世間の習わしから判断する人はその逆を信じてしまいがちです。人々はどうして自分たちを不安定な状態に置きたがるのでしょうか。どうしてほんのちょっとしたことでお互いに嫉妬心を抱きそれを煽るようなことをするのでしょうか。面倒に巻き込まれ苛立つことに喜びを見出す（そう見える）人々がいるのは事実です。こういった人々は（キケロが言うには）口論することを楽しんでいるのです²⁾。実は、反目とか憎しみのない家族はごくわずかなのです。とはいえ、（心から私はそう望んでいますが）これを避けることに誰もが関心を持ちますが、何か不安を与えるときには必ずその気持を共有することになります。ところで、私の意図するところからかなり外れてしまい、申し述べたいと思っていたことをほぼ忘れてしまっていました。率直に言いますと、町で時間の大半を過ごす人は、田舎での長い休暇なしで済ますのは非常に難しいということなのです。付き合いが限定されると、お互いに関係が非常にぎこちなくなるということなの

2) キケロ『アッティクス宛書簡』2.7

です。その結果、聖ミカエル祭までにはあからさまな口げんかとなり、お互いに無遠慮な振舞いとなり、陰では赤の他人のような接し方をすることがあります。そういう次第ですので、貴方から時々家族に必要な上機嫌について教示していただきたいと考えます。そうしていただけますと、私たちは全員、貴方のことをとても気に入っていますので、私たちにとって有益だと考えるわけです。

以上率直に申し述べましたので、私の知り合いの一团について言わせてください。彼らは現在田舎に行って、ある不在の貴族の館を利用していますが、互いに上述の不便を避けています。彼らは同じように善良ですが、才能や好みがさまざまな10人ないし12人の集団です。そこで、さまざまな気質がさまざまな喜びを生み出してくれることを期待しているのです。しかし、目的に差異がないためか似たような原因のためにか、同じ人たちの間である種の飽満感が生じます。これが募って不機嫌とか不満になることがあります。この貴族の館には療養所に用いるように考えられた大きな翼があります。気難しいことを言ったり、仲間に不機嫌とか不快感をさらけ出す振舞いをしたりした人は誰でも、直ちにこの療養所の一室に運び込まれます。この部屋に入れられた人は、従順な態度や嘆願の気持を示して、仲間の大多数から付き合いをしてもいいと思われるまでは、部屋から出られません。お分かりのように、意地の悪い言葉や不快な振舞いはすべて罰を受けるに十分な根拠となるのです。召使にいらいらした口の利き方をしたり、相手に同じこと、つまり、不注意とか不機嫌をさらけだすようなことを繰り返させたりすることは、同様に、執行猶予のつかない犯罪です。しかし、不機嫌な発作が自分に振りかかっていると認め、自主的に引きこもる人は、療養所から帰って来たときには大きな尊敬の念でもって受け入れられると規定されています。お互いに直せない場合には、こういった健全な方法によって、少なくともほかの人々に厄介がかからないように面倒を見ることが期待されます。クラブには安らぎと静穏を維持するために打ち立てているルールはほかにもいろいろあります。人々の間で生起する出来事に対するその効果を皆さんのために、貴方に時々お伝えしたいと思います。

敬具

第425号 1712年7月8日（火曜日）

春と冬、夏は春を衰えさせ、夏の美は素早く消え失せる。

ふらつきよろめいた秋が元気のない翼を広げると、

そこに寒い冬が霜を身にまとして忍び寄る。(ホラティウス)¹⁾

観察者殿

暑くむしむしとした一日を過ごしたあとで、涼しく静かな夕暮れの恩恵にあずかることほど私を喜ばしてくれるものではありません。つい先頃、そんな一日を経験しました。太陽が沈む時刻になると、庭で澁刺とした夕暮れを享受できるのだと考えて嬉しくなりました。

1) ホラティウス『頌詩』4.7.9-12

そう考えると、24時間まるまるが楽しくなります。私は直ちに長椅子から立ち上がり、庭に下りて行きました。まず、石段を12段降りて、それぞれに白い大理石の彫像がある芝地が四つに区切られている広い区画に向います。ここは低い塀で広い庭とは仕切られています。そこかた鉄門を通ると、ぎっしり植え込まれた芝で出来ている長く幅広の散歩道があります。この散歩道は両側に背の高いイチイの木があり、両方に水路があります。右手には、荒れ地との境となる散歩道があり、小路やあずまやへとつながっています。左手には、数多くのミカンの木やギンバイカの木が植わっているひな壇式の半円形状の土地があります。月が煌々と照り、とても心地よく太陽の代わりとなり、無数の喜ばしいものを見るのに十分な光を注いでいました。同時に、昼間の熱を奪ってくれているのでした。水に映る月、木々の葉をさらさらと揺する風、ツグミや夜鳴き鶯の鳴き声、涼しい散歩道、こういったことすべてが重なり合って、私の不快な思いを追い払ってくれ、心の平穏をもたらし、今後の幸せを感じさせてくれるのでした。このような快い隠遁生活をしていると、私は自然に、ミルトンの『沈思の人』という詩の何行かを口ずさみ始めました。この詩の感じは現在の私のとりとめのない思いにぴったり合っているのです。

美声の鳥よ！ 愚かな騒音をさえぎり、この上なく耳に快く、
この上なく憂いを孕んでいる鳴き声よ。
私はお前の夕暮れの歌声を聞きたい。
お前を探しながら、私は乾いた、きれいに刈り取られた
芝生の上をただ独り歩く。
夜半近くに浮かんでいるさすらっている月を見る。
まるで道に迷ってそこに導かれたような月を。
天空の広大な道なき道を歩んで来た月を、
あたかもお辞儀をするかのように、
ふわっと浮かんだ雲の中に傾いている月を。

そのとき、何か不思議で謎めいた夢が、
軽やかな流れを受けて羽を揺する。
活気に満ちた肖像画が姿を見せ、
優しく私の目に留まる。
目覚めると、快い調べが頭上で、周囲で、
あるいは、下方から漂って来る。
その調べは、精霊が、そうです、
森の善霊が、善良な人に届けているのです²⁾。

2) ミルトン『沈思の人』61-72, 147-54

その後、私は素敵な夜と昼の素敵な移り変わり、素晴らしい季節の配列、絶え間ない季節の巡りに思いを馳せました。ああ、この衰えつつある年齢から今一度若さと活力の溢れる青春期に戻れたらいいのに、でもそんなことはあり得ないのだ、と私は発するのです。今私に出来ることは、心広く満ちたり足りた気持と孤独が与えてくれる喜びを享受することで、現在の不自由を和らげることなのです。このように考えて、私は花の咲く堤に腰を下ろしまどろみました。この眠りが花の香りと草いきれのせいなのか私の現在の思考のせいなのかは分かりません。だが、庭の善霊が私を散歩道へ導き、一年の巡りのさまざまな光景を見せてくれたように思えました。夢にまで見ているとき、私はこれを書き留め、観察者殿にお送りすることにしました。

私の方に向ってくる最初の人物は、実に素敵な雰囲気と姿をした若者でした。もっとも、この若者の資質はまだ年齢に釣り合ったものとはなっていませんでしたが。とはいえ、顔の表情には輝きと満足感と喜びが溢れていましたので、これまでに会った中で最も望ましいものと思いました。彼は花柄を織り込んだ緑色の絹地の長いマントを羽織っていました。頭にはバラの花冠を載せ、手にはスイセンを持っていました。足下にはサクラ草とスマレが咲いており、彼が接近すると自然が活気づくのです。変化して見える絹の外衣の一方にはフローラ、もう一方にはウェルトウムヌス³⁾が見えました。この後、突然月の光線がよろいにきらきらと反射するのを見て驚きました。剣を抜いて完全武装して近づいて来ていたのです。すぐに、善霊が、これは長い間春の従者たちの中に居座っていたマルスなのだと教えてくれました。彼は優しい容貌の霊に道を譲りました。これはヴィーナスでした。彼女は装飾品を何もつけず、あるのは彼女の美しさと地球を包み込んでいるケストゥス（帯）だけでした。彼女は右手に地球、左手には金の笏を持っていました。彼女の後には、互いに腕をからませた三美女神が従っていました。彼女たちの腰帯はゆるやかで、代わるがわる足で地面を踏みつけ、柔らかな調べを奏でました。すると、この季節に属する三つの月が現れました。3月が私の方に向って進んで来たとき、その表情には力を弱めた荒々しさが浮かんでいるように思えました。荒々しさは柔かな季節に分類される月にはふさわしくないのです。だが、さらに進んで来ると、彼の顔立ちはいつの間にか穏やかで優しいものになりました。彼は表情を和らげ、とても優しい表情で目を向けますので、4月に道を譲ったのですが、私は彼の死を悲しく思わざるを得ませんでした。4月は想像できないほど大層陽気に見え、大勢の喜びを従えていました。表情はしばしば曇りましたが、すぐに元に戻り、変わることなく微笑を浮かべていました。つぎに、弓を張り、矢を放つ恰好のキューピッドを従えた5月がやって来ました。彼が通り過ぎるとき、恋人たちの柔らかな愚痴や穏やかな喜びや愛情のこもったため息などが入り混じって聞えて来たように思えました。操を誓う声やあちこちから不実をなじる声も聞こえて来ました。こういった声が私の耳に入ると思うとすぐに、風がこの声をふわりと運び去るのです。これが過ぎ去

3) ウェルトウムヌスは、季節による植物（果樹）の推移（たとえば、木から花、花から果実、果実から木への推移）を司る神。オウィディウス『変身物語』第14巻参照。

ると、ある人が元気一杯にやって来るのが見えました。この人の顔は血色がよく、髪の毛は黒く、巻き毛で肩まで届き、黒い絹のマントをゆったりと羽織っていました。彼は春の後から急ぎ足でやって来て、庭の陰と涼しい噴水を捜し出しました。ゼピュロスの一団が羽で彼を煽ぐと大いに喜びました。両脇には二人の仲間と一緒に歩いていました。これによって、彼はこの上なく感じよく見えました。その一人はバラの指をした曙で、足下には露を帯びており、グレイの衣装をまとっていました。もう一人は金のペンダントの飾りのついた淡青色の外衣をまとった宵の明星でした。宵の明星が彼が持っているスイカズラとゲッカコウの束を見ている間、彼はひと休みしました。彼らの後からついて来たのは、4人の刈り手を従えたパン（牧羊神）とケレス（豊作の女神）でした。彼らはカラスムギの笛とドラの音にあわせてモリスダンスを踊っていました。それから、付き添いの月々がやって来ました。6月はまだ春の名残りを少し留めていましたが、あと2つの月はあまり元気がない足取りのように思えました。とりわけ8月は、歩みを進め、シリウスが頭上になつぷりとその光を降り注ぐ頃になると、ほとんど気を失いかけてるように見えました。これらが通り過ぎて、年齢の重みで少し腰が曲がっているように見える人物に道を譲りました。しっかり生え揃った顎鬚と髪の毛は、黒白半々のごま塩状態になっていました。彼は踏みしだく落ち葉の色のよう黄色っぽい色合いの外衣をまとっていました。彼が手にしている大量の果物でこれまでの光景を追い出した埋め合わせをしているようには思えませんでした。彼の傍らを歩いているのは、健康的で元気な顔色をした「豊饒」で、角からさまざまな産物を取り出していました。リンゴ酒のグラスを手にしたボモラが続きました。トラが引く二輪戦車に乗ったバックスにはサテュロス、ファウヌス、そしてシルウァヌスの一行が従っていました。つぎにやって来た9月は、その表情を見ると、新たな春を約束しているように見え、春の月々のお仕着せを着ていました。10月は、まるでたった今ブドウ絞り器から出て来たかのように、ブドウの汁が全身についていました。11月は、この区分に入るのですが、何度も立ち止まってどちらかといえば、すぐそこに迫っている冬に心が傾いているようでした。彼は年齢の極みに達した老人の姿で近づいて来ました。髪の毛は真っ白で本物の雪のようでした。目は充血しており鋭く、顎鬚はつららのように大量に垂れ下がっていました。毛皮に身を包んでいましたが、ひどい寒さで縮み上がっていましたので、手足は縮こまり、体は地面につかんばかりに曲がっていました。そのため、彼の両脇を支えている祝祭の神コーモスと運命の女神の母「必然」⁴⁾がいなかったら、彼は自分では立っていられなかったに違いありません。コーモスの姿とマントは私をとて驚かせました。近づいて来ると、彼の顔立ちは私がこれまで見てきた中で最も望ましいものに思えました。マントの前面には、喜び、楽しみ、満足の絵が描かれており、歓楽の無数の標章がついていました。戯れには顔があり、同時に二つの方向を見ていました。だが、彼が通り過ぎると、姿と顔がほとんど対応しないのが分かって驚きました。頭は禿げており、手足以外はすべて年老いて歪んでいるのでした。マントの背面にはぼさぼさの髪をして血

4) プラトン『国家』参照。

まみれの短剣を手にした殺人が描かれていました。緋色の外衣には怒りが、疑いが目を細めていました。中でも最も目を惹いたのは、ラピテース族とケンタウロス族の争いでした⁵⁾。私はこのぞっとする姿をひどく嫌い、目を農耕の神サトゥルヌスへと転じました。サトゥルヌスは彼の後から誰にも見られずに片手に鎌を片手に砂時計を持ってこっそりと忍び寄っていました。「必然」の後からは、絶えず油が補給され、炎は永遠であるランプを手にした火の女神ウェスタがいました。彼女は険しい表情をした「必然」を慰撫し、「必然」がきちんとした選択ができるように暖めてあげました。12月、1月、2月が全員毛皮をまとめて通り過ぎて行きました。彼らにはほとんど違いはありませんでした。彼らはどちらかといえば心地よい春の再訪に向って急いでいましたので、程度の差はありますが一様に不愉快な顔つきをしていました。

第426号 1712年7月9日(水曜日)

【スタイル】

黄金への呪われた渴望よ。

いかなる信頼の絆で邪悪な金を手にするのだ。(ウェルギリウス)¹⁾

先日、食事に誘ってくれたとても愉快的友人と一緒に馬車で田舎に向っているとき、この友人は、子供に対する親の世話と親に対する子供の敬愛の念について話し始めました。親と子に互いに尊敬の念があれば、個々の美德や資質は代々引き継がれていくのだ、と彼は考えているのでした。彼は分別と理性に絶えず陽気さと上機嫌を混ぜ合わせますので、つぎのような話になったのでした。

いつのことか、また、誰の治世であったかは確信が持てませんが、父と息子にこの相互信頼と正しい判断力がなかったことがドイツのヴァレンティヌス家にとって命取りになったのです。錬金術に長けたバジリウス・ヴァレンティヌス²⁾は、息子のアレキサンドロナスに秘儀を授けたのです。ところで、こういった秘儀は、努力家で、敬虔な人で、高潔かつ純粋な心の持ち主でないと手には出来ません。バジリウスは若くて若者にありがちな逸脱したところのある息子には、過ちの多い彼の手に渡ると運用を間違えることが分かっていたので、修得した最大の秘密を打ち明けませんでした。しかし、肉体と精神の確かな不調から死期が近づいていると考えたバジリウスは、アレキサンドロナスを呼び寄せ、ベッドに横たわる自分のそばに座らせ、召使を全員部屋から出し、聞いている人が誰もいず、息子と二人きりになったのを確かめてから、厳かに精通者の用語を用いて最も重要な秘密を明らかにしたのです。息子よ、お前の父は後世に豊かな財産を残すためだけでなく、子孫を持たないように気を配るために長年に渡り研鑽を積んで来たのだ、と彼

5) ラピタエ人とケンタウルス族との戦い(オウィディウス『変身物語』第12巻参照)。

1) ウェルギリウス『アイネーイス』3.56-57

2) ヴァレンティヌス・バジリウスは14世紀初頭のドイツの著名な錬金術師。

は言いました。わが子よ、驚いてはいけない。私からお前を引き離すのではなく、私は決してお前から離れないと言っているのだ。その結果、子孫を持つことにはならないのだ。いとしいアレキサンドロナスよ、9ヶ月で伝播したことの効力を見てごらん。自然を否定しているのではなく、自然に従い自然の手助けをするのだ。親の胎内にいる幼児のように、調合したこの再生の薬は長期に渡って効き目があるのだ。よく見るのだ、この小さな薬ビンと壺を。この壺の中には軟膏が、片方には液が入っている。わが子よ、これらには死亡した直後に生命の泉を蘇らせる力が集められている。そして、新たな力、新たな活力を与えるのだ。要するに、人体の器官や感覚はすべて回復し、この私の薬が効いている限り、生まれたときのようになるのだ。しかし、いとしのわが息子よ、体がまだ温かく蘇生の可能性がある息が止まってから10時間以内に薬を使うようにしなくてはならないのだ。絶え間ない努力と瞑想によって私の体が異常をきたしているのが分かる。そこで頼みがあるのだが、私が死んだらすぐに、この軟膏を塗ってくれ、そして、私の体が動き始めたら、この貴重な液を私の口に注いで欲しいのだ、そうしないと軟膏の効き目は無いのだ。そうすると、私がお前を持ったように、お前は私に生命を与えてくれ、私たちはその時からお互いに生命を授けた権威を捨てて、兄弟として生き、二人して再び再生のために薬を必要とする時間までに新たな薬を調合することになるのだ。この不思議な薬の成分がアレキサンドロナスに伝えられて二三日後に、バジリウスはこの世を去りました。しかし、このように優れた父を亡くした息子の悲しみは大変大きなものでしたので、悲嘆に暮れる彼は何も出来なくなって薬のことはすっかり忘れ、父が言っていた効能の刻限が来てしまったのです。実を言うと、アレキサンドロナスは機知に富む道楽者で、父は持って生まれた時間を終りまで生き抜いたのであり、父の人生は長く、規則的な生活にふさわしい変わることのない一生だったのだと考えました。しかし、哀れな不信心者である彼自身は、これまでのひどい生活を悔いるために、新たな生が欲しいと考えました。そして、考えた末にこれまで通りの生き方をするが、自分にその時が来たら、この珍しい薬を用いて蘇生して、その後は堅く悔い改め、敬虔な人生を過ごすことにしました。

従来、神は、子供たちの人格と適性を無視し、親の努力と野望という虚栄を見せびらかすために生まれて来た子供に名前を残すだけのような、節度を欠いた振舞いをする自己愛を罰すると言われて来ました。

たまたま、以上のことがバジリウスの家で起こったのです。アレキサンドロナスは家計費、調度品、そして不遜な従者といった窮境の中で、潤沢な財産を使い始めたのです。そして、彼は気づいたのですが、彼自身の死が近づくまでこの生活を続けました。バジリウスは自分とはまったく異なる息子によって罰せられましたが、アレキサンドロナスにはある天の配剤がありました。当然のことながら、邪な人物は疑い深くなります。アレキサンドロナスは嫉妬心のほかに、レナタス、これが息子の名前なのですが、レナタスが邪悪な気質の持ち主だとの証拠をつかんでいました。

私が見たところ、この秘薬の真の秘密を誰かほかの人に打ち明けるのは安全でないと考える十分な根拠をもっていたアレキサンドロナスは、保護者の賜物ではなく、強欲から秘

薬の効果と結果への期待を確かめることにしました。

このように考えた彼は、レナタスをベッドの傍らに呼び、この上なく哀れを誘う身振りと口調で彼に話し掛けました。息子よ、お前は虚栄と快樂に溺れているが、私もそうだった。お前も私もわが先祖の名高いバジリウスの深遠な知識の素晴らしい効能を避けて通ることは出来ないのだ。バジリウスの表象は哲学界では名立たるものであり、私は、ヘルメスの緑玉板（タブラ・スマラグディナ）³⁾の深遠な謎を私に伝えたときの彼の高德な表情を忘れることはないだろう。「これは真実であり、ごまかしの色と大きくかけ離れている。劣っていることは勝っていることと同じであり、これによって、ある種の仕事は達成され完璧なものとなる。父は太陽で、母は月で、風は胎内にあり、地球は乳母であり、あらゆる仕上げの母だ。これはすべて節度と英知でもって受け止めなくてはならない」と彼は言ったのです。錬金術師たちは専門用語を駆使するとき風変わりな敬虔の念を込めます。これはお金の大好きな人たちにもよく見られことであり、自分をごまかしているに過ぎません。そこで、現世の目的のために規則的かつ厳格に振る舞うことは、つぎに勧められる純真な心と共感します。レナタスは父が精通者のような口ぶりで敬虔の念を込めて喋るのを聞いて驚きました。一方、注目されているのが分かったアレキサンドロナスは話を続けました：この薬ビンと小さな壺があれば、お前の財産は殖え、帝国一の金持ちになるだろう。私は終の棲家へ行くが、よく知られた塵に帰りはしない。それから、彼は活発な顔つきに戻って、自分の死後1時間以内に全身に軟膏を塗って、喉にバジリウスから貰った液をたらしにくれると、死体は純金に変わるだろう、と息子に告げました。私はこの尋常でない二人の間に誠実な愛情があったとは取えて言うつもりはありません。だが、父親が情熱を込めて遺体の世話を委ねたら、息子は自分の弟妹に提供するために、彼の体を切り離しはしないと明言するのに遅れを取らなかったのです。

というわけで、アレキサンドロス亡くなりました。すると、いわゆる相続人は気まぐれから、施術にかかる前に、最愛の父の身長と横幅を測り、その価値を計算せずにはいられなかったのです。彼は莫大な報酬があると知ってから、作業を始めたのです。ところが何と、全身に軟膏を塗り終え、液を注ぎ始めたとき、遺体が動き、レナタスは驚いて薬ビンを割ってしまったのです。

第427号 1712年7月10日（木曜日）

【スティーラー】

行動だけでなく、言葉にも注意すべきです。悪口を言ったり、不善をなすなんてことはとんでもないことです。（キケロ）¹⁾

中傷したくなるのは邪悪な心の持ち主であることの確かなしるしです。悪意がなく率直な人たちはそんなことに喜びを見い出しません。これは自分自身の内部にある賞賛に値す

1) キケロ『カエリウスのための弁論』3.8

ることを軽視する気持と他者にそれを認めることが我慢できない気持の双方から生じます。美德がそんなことを誘発するはずはありません。美德を重んじる人はこれを大変不快に思っています。中傷するのが習癖となっている人は自分に降りかかって来る場合には、必ずそれを減ずるように努めます。先日訪問しているときに、自身がこれまで非常に粗末な扱いをされて来ている婦人からかなり無礼な言い方をされた婦人が、それにとっても穏やかに、「奥様ご勘弁下さい。私なんか奥様の足下にも及びません。私は誰の悪口も言いませんし、悪口を言われるのも初めてなのです」と言い返しました。心の狭い人たちは、名声というものは味方してくれる人の数にあると考えますが、実際には名声は立派で尊敬に値する行動と切っても切れない関係にあります。影が体についてまわるように、名声には美点がないといけません。確かに、人々が群がりますと影は見えませんが、人々がいなくなりますと再び影が出現します。怠け者や遊び者やつむじ曲がりや町で飛び交っている人々をおとしめるような取るに足らない話にすぐに飛びつきます。悪口を言う楽しみがなければ、やる気が起こらなくて外出できず、意地悪の度が過ぎていて口を開くことが出来ない人が大勢います。先日、ポスト・レターを読んでいたある婦人が、「彼女の気取った態度にもかかわらず、彼は何らかの話を耳にして、縁組みが壊れる」との文字を見て、読んでいる最中に「馬を！」との指示をするのを見て少なからぬ気晴らしをしました。美点を備えた若い女性が有利な結婚話を逃したことは、誰か別人が悪意に満ちた知人に知らせるといけなないので、愚図愚図できるようなニュースではなかったのです。朗報を聞きたくないという気持は、すぐに暴露したいという気持と同様で、陰口を叩く人にとっては分かち難い属性です。だが、悲嘆の話題にしか喜びを見い出せないこういった心的状態は惨めで軽蔑すべきことです。この気質はこれまで雄々しい精神の持ち主にとってはこの上なく忌まわしいものでした。アレクサンダー大王の悪口を言っているのを知られたペルシアの兵士は、上官から「君を雇っているのはアレクサンダーと戦うためであって、悪口をいうためではないのだ」との警告を受けたのです²⁾。

キケロは、依頼人を中傷から守るために行った弁論において、非常に見事にかつ理性的につきのように述べています：訴追人と特別な関係のある人は大勢います。私が弁護する人に悪意を抱いていることで名高い人も大勢います。生来中傷することが大好きで、他人の善を羨む人も大勢います。こういった人たちはこの種の噂を広めるのに大きな貢献をします。中傷ほど迅速で、広まり易く、歓迎され、瞬く間に広まるものではありません。私たちを不利にさせる噂に根拠があっても、それを無視したり軽視したりすればいいと言っているわけではありません。そうではなくて、その根拠を言える人、つまり証人がいなくて勝手に提出される、あるいは、誰から聞いたか忘れている人の証言だとか、気に留める価値のない浅はかな考えから生じる、こういった証言は取るに足らないものであって同胞の無実と名誉を守るためには信用できないのだと考えるべきなのです³⁾。悪い噂の出所を調べ

2) ダリウス軍の將軍メムノンに関わるお馴染みの話。

3) キケロ『プランキウスのための弁論』23.57

て見ると、キケロが言っているように、しばしばどこにも見当たらないことが分かります。浅薄な人たちの間に行き渡らせようと腐心する人はどうしようもない卑劣漢なのです。ウォリックシアーに、注目に値し、以前は敵意と不和でかなり有名だった町があります。この町の主だった家族は、今ではブルーマントル夫人という称号で名高いつむじ曲がりの貴婦人のお陰で、内緒話や陰口や妬みや秘密の悪意はすべて、陽気さと娯楽に転じられているのです。この女性は長年に渡って、いわれないゴシップをでっちあげるいわゆるゴシップ好きの女性たちを出し抜いて来ました。この方は、視力はすっかり衰え、足元もおぼつかなくなっていますが、気質は相変わらずです。足が不自由で絶えず在宅しており、目が不自由なために耳をそばだてていますが、こういった二つの事情から、自らの住まいを善悪を問わず町で起こるあらゆることの受け入れ場所としています。彼女は、悪評に関しては素晴らしい記憶力を備えているようです。彼女には注目すべき点がもう一つあります。それは、お年寄りにはよくあることですが、最近のことよりも若い時のことを鮮明に覚えているということです。さらに言えるのは、彼女は他人を愛さないだけでなく、すべての人を憎んでいるのです。ローマの像⁴⁾も、この夫人ほどうまく悪意をぶちまけるのに資してはいません。彼女は誰に聞いたかは分かりませんが、耳に入った情報を直ちに再現できます。それゆえ、彼女は町中にさらけだすのですが、そのことで誰も気分を害することはありません。彼女はこの上なく落ち着かなくつむじ曲がりですので、周りのあらゆる人と言い争いをします。そして、時々、出来心から、直ちに転居することになります。この気まぐれを満たすために、彼女は庭に出て行くことがあり、また、連れ出された人たちはまたすぐに部屋に引き戻されることになります。彼女のいつもの習慣によって、言い争いをするために、ある家の貴婦人から定まった時間に呼び寄せられます。皆がからかいの種が欲しくなると、すぐに彼女がその気にさせられ、それまで招かれたことのない家で食事を摂ることになります。そして、全員に向って洗いざらい口にします。こうすることで、彼女はどの家で住人となっても必ず皆の心を掻き立てることになります。誰もが自分たちの企みを裏づけるために彼女にいろいろな話をしますので、彼女は町一番の情報提供者となります。こうして、根拠のない話は次第に消え去りますが、真実が雑多な噂によってもみ消されることもあります。皆があることに反対したくなると、そうです、それはわがブルーマントル夫人の回顧録に頼ればいいのです。

吟味しないで人の不利になるような考えを受け入れる人は誰も、この善良なブルーマントル夫人の情報を頼ることになります。彼女はより良い情報を得るためのほかの助けがないので自分の耳にその責任を負わせているのです。このことに加えて、他の中傷の運び屋さんたちは、彼女が失っている能力を近隣の人たちの長所を認めるために使うというよりはむしろ、この能力の行使を一時停止しているのです。そこで私としては、女性の読者のために、町にはどこにでも自発的なブルーマントル夫人のような人がいるのだとお知らせしておきたいと思います。

4) パスクワンの像については、第23号参照。

第428号 1712年7月11日（金曜日）

【スタイル】

悪魔は最後尾につく。(ホラティウス)¹⁾

会話を独り占めにするのは無礼で道理をわきまえない過ちです。私が日々町の人たちを楽しませており、気質だけでなくもっと有能な人々に自分たちの考えを述べていただく機会を与えていないことを後ろめたく思っていることは、自分自身も自分にもおそらく異議を唱えるかもしれません。加えて、先日漏れ聞いたのですが、ある人がつぎのように言っていました：「何故この新聞は学問と道德の話題ばかりなのだ」「何故機知やユーモアなどだけを触れ込むのだ」「こういったことは学識のある優れた教育を受けた人を楽しませるために有益なだけだ」「私ならどんな人たちにも必要あるいは有益ないろいろなことを扱い、教養的なことだけでなく、機械的なことも取り上げるのだが」「儲け方とか節約の方法などの方が、哲学者や英雄や将軍や詩人が言ったこととか行ったことの話よりも、もっと大勢の人たちに役立つのだ」と。私はこの批評家が私の仕事について語るのを聞くと直ぐに、彼の言っていたことを書き留めました。そして、階層、男女を問わずあらゆる人に注意を払うことで、思索の幅を広げることにしました。信頼できる相手からのものであることが確かめられるように、名前と居所を添えた手紙を送っていただいたら、本紙にそれを忠実に掲載することにしました。見習い期間中の若者にとっては、誰某がどういった方法でロンドンの役人になったかを知る方が、獅子の心のついた身分証を見るよりもはるかに重要でしょう。各自の成功への明らかな道が完全に見落とされているときには、世間の人々は実際、非現実的で信じがたい偉業にうっとりするものです。若者が株式の歴史を知り、秘められたどんな力が働いて一日のうちに株価がこれほど上下するのか知るほど素晴らしい時間の過ごし方はないのかも知れません。若者にとっては、エクステンジ・アレ²⁾の達人の話を読んだ方が、人生の最大の関心事である富への道へと導かれるかも知れません。確かに、若者にとっては、希望と不安をうまく教えて貰うことほど有益なものはほかにはないに違いありません。他人が意気盛んなときに控え目にし、他人が売り時期だと考えるときに密かに買いにでる喜びがあります。人々にとって有益な情報を持っている人たちにおいて本紙に交替で登場してもらいたいと思います。最近経度の創案をした気高い人物³⁾からカミソリの革砥を作り出した謙虚な人物⁴⁾までもが彼らを歓迎します。船を無事に航海させることとか、どこに向えばいいか、どの暗礁を避けたらいいか、窮地にあるものをどの海岸に救いを求めたらいいか分からずに荒海で打ち上げられる人を援助

1) ホラティウス『詩の技法』417

2) 王立取引所は1568年に開設され、1666年のロンドン大火で消失。第155号参照。

3) ここで言及されている人物は不詳。グリニッジ天文台の初代長官になったジョン・フラムステイード(1646-1719)は、*Historia coelestis* を著した。王立グリニッジ天文台は1675年に設立された。なお、1714年には、下院の委員会にニュートンが出席して、経度に関する証言を行った。

4) カミソリの革砥に関しては、当時の新聞にさかんに宣伝が載った。

するといったことは、価値あることで彫像が建つにふさわしいことです。また、容貌をむさくるしいものにせず、すべすべしたものに作る道具を使いやすくさせる手段を見つけ出した人も、同様に歓迎されてしかるべきです。重要な事柄が評判を呼ぶとしても、ささやかなことであってもさげすむべきではありません。美点はすべて明らかにし、技術はすべて向上させるために、私は人々のために、繰り返し哲学者だけでなく熟練工に呼びかけます。もし私たちがシティーの城壁内のあらゆる商店の事細かな成功譚とかどの地域が歩いて30フィート以内の人が購入したとかの話を開けば、大いに役立つ事でしょう。もし先祖の仕事がうまくいって従者つきの大物になったとすれば、その話を聞いた人々はそれだけの富を獲得しようとして勤勉さを刺激し、楽しもうとする贅沢さを恥じ入らせることになるに違いありません。

こういった類いの情報に広がりを持たせるためには、女性たちの勤勉を抜きにすることはできません。家事の切り盛りのお陰で夫の誉れとなる女性は敬意を払って記録に留められるべきですし、逆に、無駄遣いする女性は汚名をもって記録に留められてしかるべきです。このように家庭生活という話題になりますと、重要な点で注意を喚起させるためには、時折ちょっとした惨事を提供し、最もひどい状況である破産について記すことも悪くはないでしょう。豊かさも信用も上機嫌さも満々とした希望も裕福な財産も、瞬く間に、貧窮と生気のなさで自信喪失と悲しみと悲惨さに転じてしまうものです。昨日は気前よく他人の窮状に手を差し伸べることが出来た人も、今日は親友から遠ざけられることになります。これは怠慢な人には当然であり、勤勉な人には嘆かわしいことであると示すのは有益に違いありません。商人が書いた文章はわが国の人々に商人がいかに重要であるかその真の意味を提供するかもしれません。商人の語ることから、商人が国の富のために力を尽くしているのは、兵士が国の名誉のために危険な突破を試みるのと同じことだということが分かるかもしれません。双方とも、危険を利用して自分たちを優位に導いているのですが、この両者以外の人々が成功の共有者になった例は私は知りません。

物語の戦闘はまず理解されることはないというのは、歴史を読む人たちから異議がでます。この不幸が生まれるのは、歴史家が戦闘隊形を組み、変更する、そして敵が攻め寄せて来るあるいは撤退する方法を知らないためなのです。ところが、私がこれから意見を求める寄稿者たちの考えでは、危険性は別種のものであり、彼らには専門用語を用いること、さらには、自分たちには周知のことを読者に未知の言葉で描写しないことを警告する必要があります。私としましては、この提案によって新たな状況、人物に関して大きな収穫があるものと期待します。多くの人々が熟知していると思っている世界もすっかり目新しいものに映るのです。この種の知性は人間社会の絆や相互依存に対して生き生きとしたイメージを提供し、愚かな偏見を取り除き、自分のことにしか目に入らない人々の心を広げることになります。要するに、いろいろな技術、職業、および商いについての知識が力を発揮すれば、新しい分野に関心を寄せざるを得なくなり、これまでよりもっと心地よい知識が持てることになるのです。

第429号 1712年7月12日（土曜日）

【スティール】

彼女は、言葉のごまかしによって、人々を
物事に対する真の評価へと導く。(ホラティウス)¹⁾

観察者殿

私が、田舎暮らしをしている感じの良い人たちの報告をして以来、不機嫌な人々にとって、療養所は大変な好結果をもたらしているとの当地からの報告を受け取っています²⁾。書簡には、2、3の人たちの特別な事情が述べられています。この人たちは自ら進んで隠居する良識を備えており、それぞれの記録を見ると、もっともな理由から田舎に引きこもったのだということが分かります。

「独身のメアリ・デインティ夫人の記録によると、彼女は賞賛されたいという虚栄心があり、自らの美点の欠落を意識して、自ら進んで田舎暮らしを選んだこと、彼女は虚栄心の強い人物は、上品な人たちとの生活ではこの上なく耐えられない存在であること、そしてまた、自分は美しいと思われるかもしれないが、ほかの人たちよりも言い寄られたりお世辞を述べられたりしないことが確信されるまでは再び人前に出ないと固く望んでいることが分かります。さらに、彼女は自分よりも他人を褒め称えるのは一種の優越感だと考えていることが分かります。最後に、彼女が療養所に入ったのは、言い寄ってきたある人物を避けるためだったことが分かります。それゆえ、彼女はしかるべき場所からの賞賛は攻撃の宣言であり、非難の罰を受けることになることを願っているのです。非難することで欠点のあることを知らせることになりますし、賞賛することでそれを後押ししているのです。以上。」

この記録には慎ましさと誠実さが伺えると思いましたが、わが友人によると、この主張には根拠がなく、賞賛されることへの嫌悪を宣言しているのはこれを獲得するための密かな策略と解釈できるとのことです。そのため、この書簡には返事を出さずにテーブルの上に置いたままにしています。

「リディア・ロー夫人の記録によると、リディア夫人は上流階級の人で、一紳士と結婚したこと、自分のことを満ち足りているとも不満であるとも思っていないこと、夫が無骨者であること、彼女が人のお付き合いができないこと、彼女が田舎に滞在中は療養所が自分の住まいであることを希望していること、人々が同輩と楽しく過ごしたいと考えていること、ロー氏は自分がふさわしいと思ったら人々と一緒にいたいと考えていることな

1) ホラティウス『頌詩』2.2.19-21

2) 第424号参照。

どが分かります。」

早速、リディア夫人はまだロンドンにいたことが決まりました。

「イナーテンプル法曹学院の郷士トマス・サドンの記録によると、サドン氏が論争が多すぎることを意識していること、彼は声が大きいこと、彼があらゆることを論争の対象としたがること、彼は先般天井が揺れた時、反対側のある弁護士が天井が落下してくると断言したという理由から、ウェストミンスターホールに残っていたこと、彼は何があってもあらゆることに同意できないこと、彼は忘我の境地に入るために療養所に滞在すること、そして、忘我の境地に入るとすぐに、みんなのところに顔を出すことなどが分かります。」

みんなの前に顔を出さなくなるのは彼の体調不良しかありませんでした。

「フランク・ジョリーの記録によると、彼が療養所に入るようになったのは、自分には礼儀正しい交際にふさわしくない粗野な陽気があることに気づいたからであること、禁欲と粗食によって人々の仲間入りをする心積もりであること、彼は現在、まるで外国からの特使でもあるかのように部屋に入ってくること、彼は歩き回っている音を聞かれないようにするために、マットを敷いた控えの間がついている部屋を選んでいること、彼は節度のある振る舞いができるようになるために、鏡を前にしてお辞儀をし、喋り、飲み、食べていること、彼は旺盛な健康のために、沈着な振る舞いをする人々に不快感を与えること、彼はフン、フンという言葉のを忘れようと努力していること、また、ステッキを手離そうとしていること、このステッキを手離せるようになると、人前に顔を出すことになるということなどが分かります。」

「郷士ジョン・ルバーブの記録によると、療養所に引きこもったのは、健康状態は申し分ないのだが、長年の習わしによって、会話不足のために不平不満という病にかかってしまったからだということ、彼は何事に対しても一言言わざるを得ず、不平不満という不幸な病にかかっていること、彼自身の告白によると、この習わしは療養所に入らない限り直らないとのこと、他人からその宣告を受けるまで待てなかったこと、他の人たちが愉快にしているときの不平ほど不適切なものはないと意識していること、嘆いている人のことをどのように考えようとも同情を買っているのだということ、また、同情を買う買わないに関わらず不平を言う人物はどう見ても道化にならざるを得ないことなどが分かります。嘆願者は自らの振る舞いを振り返ってみるまでは人前には顔を出さないとのことです。」

健康を気にしすぎる人もまた、明らかに大目に見られました。社交界はその季節を楽しく過ごすことを仕事にしているだけでなく、今後の振る舞いに有益な習慣を身に付けることにしていますので、気まぐれな人とか傲慢な人、あるいは無礼な人とか自惚れの強い人

たちに自分たちの幸せを妨害させないために、こういった人たちは仲間に入れたがらないものなのです。大きな害悪が人々をうろたえさせることはめったに生じませんが、気まぐれな人を大目に見てしまいますと、時間の大半を不安な状態で過ごしてしまうことになり、消耗する原因となってしまうのです。

とりわけ、不愉快になるほどの気安さは注意深く排除しなくてはなりません。人前に裸同然の恰好で現れることは許されませんし、何の前触れもなく突然部屋に入って行くことも避けなくてはなりません。今までは誰もが慎重な振舞いをしていますので、療養所に来てからの10日間で違反者は一人しかいません。それも、ホイス³⁾でカードを捨てた時のことだけです。

彼はつぎのように告白しているのです。

「郷土ジョフリ・ホットスパーの嘆願によると、嘆願者は悪態をつき、足を踏み鳴らし、カードを投げ捨てたのですが、ご婦人方および全員に対して最大限の敬意を払っていることが分かります。また、彼が、これはゲーム上のことであって、異常をきたす動機がいろいろあることを分かって欲しいと思っていること、ゲームに勝ちたいという気持ちが負けることとまっこうからぶつかっていること、この場合の会話はすべて心の優しさという弱点に関わりがあること、それゆえ、嘆願者は仲間に受け入れられたいと心から願っていること、今後のためにいさぎよく不運を堪え忍びたいと思っていること、さらに、負けたときに憂いを見せず、勝ったときにははしゃがないように振る舞いたいと願っていることが分かります。」

3) ホイスは2人一組の4人で行うゲームでブリッジの前身。